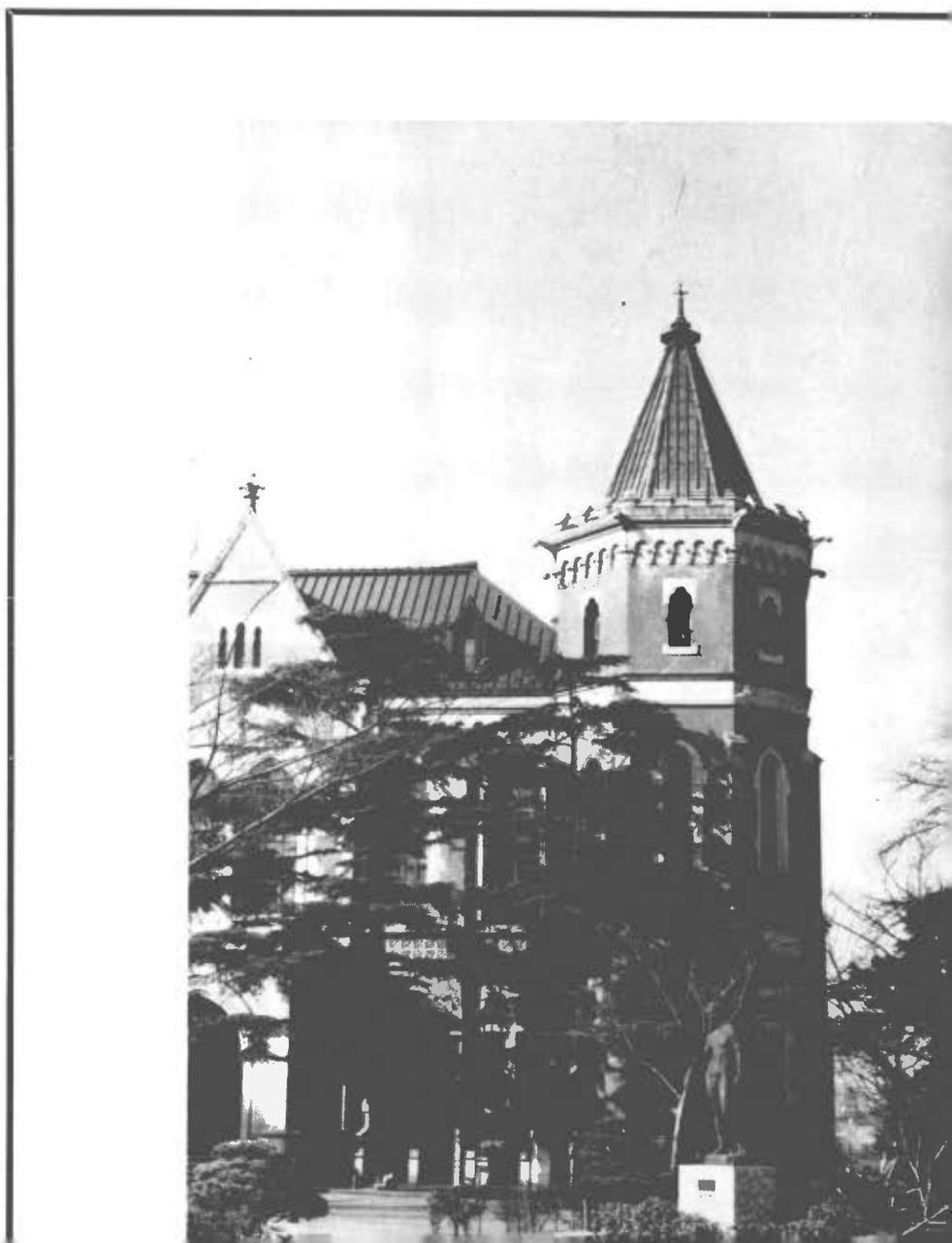


八角塔

慶應義塾図書館

昭和四十三年四月

3



慶応義塾大学

総合目録編纂をめざして

佐 藤 朔

(図書館長)

塾内の図書、文献、資料を網羅した総合目録の必要がしきりに叫ばれているが、研究者からすれば当然のことであろう。雑誌については和雑誌と洋雑誌の、全塾的な総合目録がすでにあり、殊に洋雑誌のはよく利用されている。しかし、これとてその後購入したバックナンバーあり、マイクロフィルムあり、また新しく継続購入をはじめたものがあって、いずれ増補修正版を出さなくてはなるまい。

問題は和洋の単行本の総合目録にある。目録記入法も区々であり、未記載本があるかもしれない、およそ八十万冊にのぼる全塾的な図書資料の総合目録を作るとなれば、各機関にあるカードをすべて調整をしなければならない。これには相当の人手と時間と費用がかかる。幸い複写技術が進歩しているから、調整前の、または調整済みのカードを複写して一カ所に集めて、先ずカードのかたちで総合目録を編成することが可能であろう。理屈はそうだけれど大変な仕事である。仕事は大変だけれど、何年かかってもいつかは誰かがやらなければならない。

図書館として、総合目録編纂にあたって、いろいろ考慮して準備しておかなければならない問題があるけれど、ともかく洋書の単行本について総合目録編纂をめざして、十万冊のカードの調整をはじめた。一方、慶応義塾研究教育情報センターでは、洋書、洋雑誌の目録記入法の最低基準と、カードの配列順序のルールを全塾的に設定して、4月1日から購入の分にたいしては、統一的方法を実施することにした。

しかし、総合目録としては過去の蔵書の分を繰り込まなくては意味がない。洋書だけに限って言えば、全塾的におよそ二十万冊ある。数年かかっても、まずこれから初めたいと思って、目下、鋭意準備中であるが、中央図書館としての本館が主力になるとしても、全塾的な研究教育情報センターの活発な動きが示されなければ、この難事を仕遂げることは不可能であろう。センターの実行委員長で図書館長である私としては、その方向に事を進めており、1968年度中から何らかのかたちで着手したいと思っている。

八角塔 第3号 目次

慶応義塾大学総合目録と塾内目録法の標準化

《巻頭言》 総合目録編纂をめざして	佐 藤 朔 1
塾内洋書目録法の統一・標準化について	中 村 初 雄 9

研究・教育と文献複写

文献時代と複写	長 島 昭 2
フィルムライブラリー充実の急務とその諸問題	
——特に古典学に於ける——	阿 部 隆 5
メモランダム：OP Books の入手	4

情報センターニュース	図書館研究室利用アンケート(報告)	11
------------	-------------------------	----

八角塔 / 第3号 / 昭和42年3月1日発行 / 編集発行人 石川博道 /
発行所 慶応義塾図書館 / 東京都港区三田2-15-45 / 電話(453)2111(大代表)

今回も、八角塔第2号に引き続き、研究教育資料の入手における文献複写の有効な活用法をテーマとしました。

先生がたが研究のために資料を必要とされるとき、複写を求められることがあります。複写は、その形がどんなものであっても、研究・教育に必要なインフォメーションを得る一つの確実な方法です。

複写器機の発達は、今までは到底入手できなかった資料の入手を可能にしました。入手範囲も広がり、国内はもとより国外のものもとりよせることができるようになりました。

塾各図書館は、各館所蔵のもの複写や国内の他大学図書館、米国議会図書館、ソ連国立図書館をはじめ外国図書館の複写申込みの窓口となって重要な学術情報の流通につとめております。

文献時代と複写

長 島 昭

(工学部機械工学科助手)

工学図書館の方から、文献複写サービスをどんなふうに行っているかまだ知らない方もあるようだから、その紹介も含めて寄稿してもらいたいという御依頼を受けた。

大学には図書館とコンピューターさえ立派なものがあればよい、ぐらいに考えていることではあるし、ふだん工学図書館の方々にはずいぶんお世話になっているのでお引き受けした次第である。

1. 私の経験から

以前はこんなふうだった。或る文献を入手したいと思うと、塾の図書館で見付かったためしは殆んどなかったから、まず文部省の「学術雑誌総合目録」で所在を調べる。幸い国会図書館にでもあるとわかると、実験などを半日休みにして、小金井の田舎からノココ出かけていく。カードで見付けても「製本中」とか「整理中」とかいう本や雑誌が何と多いことか。運よくあれば複写を頼んで一週間後にまた受取りに行くが、当時も金欠状態だったから複写はネガだけ頼み、学校に戻って狭い暗室で、期限切れの安い印画紙に焼付けていた。またその文献が例えば鹿児島大学にしかない、と

いうことであればすぐ手紙で複写を依頼するが、日数がかかるだけでなく、担当者が居ないのか、数回出した依頼状がナシのつぶてだった図書館もあった。

いわゆる街の文献屋とは費用の点であまり

縁がなかったが、東京工大内に「学術文献普及会」ができてからはずいぶん電話で複写を頼み便利に利用させてもらった。

そして2年程前、工学部の図書館で探す雑誌が見付からなかったのでブツブツ云っていると、「これからは他の図書館からでもコピーを取り寄せてあげられますよ」という有難い宣告があつて事態は一変した。半日か一日つぶして他の図書館へ探がしに行かないで済むだけでも有難いが、申込み用紙に記入するだけで、その所在も探しだしてコピーを取り寄せてくれるのは大助かりである。

国内のみならず、国外の図書館とも連絡をとってもらえるので、以来ずいぶん図書館の方には御厄介にな



っている。特にソ連文献などは、専門分野（熱工学）の関係上ずいぶん探すことが多いが、革命直後や第二次大戦中のものは日本には殆んどなく、モスクワやレニングラードの図書館から取り寄せてもらうサービスの有難味がわかる。因みに先日取ってもらったコピーは、ねずみ取りみたいな大きなクリップでとめてあり、何となくソ連という国を象徴しているようで面白かった。

こんな便利なサービスは、あまり多勢がおしかけると図書館で手がまわりかねて廃止か料金値上げになるんじゃないだろうか、最初はサル山のサルが菓子を独りでこっそり食う心境に共感を覚えなかったわけではないが、既に生来の博愛精神からずいぶん吹聴したあとではあるし、万一御存知ない方のために工学図書館の場合の申込み方を略記してみる。

欲しい文献が図書館にない場合、**相互貸借申込書**というカードをもらって著者名、誌名、巻号頁と更にわかれば**論題**などを記して依頼する。あとは図書館の方で適当な複写依頼先を探して全部やってくれるから、到着の通知が研究室宛に来るのを待っているだけでよい。代金は自分で先方へ送金する必要はなく、図書館へ払えばよい。文献入手に関しては、とにかくまず図書館に相談してみることが早道であるし、図書館の機能を拡大してゆく最良の道でもある。

さて複写文献の入手がこんなに容易になって満足しているかといわれると、いいえと答えるのは慢性不満症の私ばかりではあるまい。

折にふれ感じている要望とも希望とも苦情ともつかないものを敢えて記すと、大きくわけて次の二つになる。

2. もっと早く、安く

その第一は文献複写サービス自体の効率を高める問題である。例えば、もっと早く入手できないものだろうか。極端な場合を考えれば、所在目録で見ても電話で注文するのに10分、先方で書庫で探すのに15分、自然科学系なら頼む文献は100ページ以下が最も多いからゼロックスには平均して30分以下、その日の夕方郵便で発送してもらえば、翌日か遅くとも翌々日には入手可能、というのが私の質素な夢の第一段階である。

米国留学中に、図書館でちょっと頼むと、MIT へ

でも Chicago 大学へでもすぐ電話して文献を取り寄せてくれるのに驚き、また、当時日本にはまだなかったゼロックスとやらいう機械で、二セ札作りをそのなかせるほど鮮明なコピーを即時作ってくれるのに驚いたのはまだ数年前に過ぎないが、日本の急追もスピードの点は追いついていないようである。

電話といえば、電話器にアダプターをつけてゼロックスコピーを電送する技術の成功が報じられたのもうずいぶん前になるが、まだ日本での市販はされないのだろうか。研究室の電話をとりあげてケムブリッジ大学の図書館を呼び出すと、すぐ机上のメモ用紙にニュートンの論文のコピーが電送で写し出されるというのが私のまことに質素な夢の第二段階である。

1ページ30円のゼロックスも、ちょっと油断するとすぐかなりの金額になるのは頭が痛い、Amr. Phyt. や Phil. Mag. などの50年以上前の文献には、ふつうの20ページ前後の文献のつもりでコピーをとりよせると100ページを大きく越えるものがあったりして、当時ののんびりしたムードはわかるものの、後世の貧乏研究者の財布のことも考えてくれといいたくなる。また米国でコピーした時は、ゼロックスのA5位の大きさが3セント、B4位のものが7セントだったのを記憶しているが、貧乏な日本で一律に最低30円というのはよくわからない。1ページ1円以下のコピーというはできないものかと思う。

最近では、文献の入手が容易になったのはよいとして、たまった文献の間から見たいものを時々探したすのに苦労するようになってきた。そこで、複写文献を渡してもらう時に、一つ一つに分類カードをつけて渡してはもらえないものかと思う。もちろん、図書カードに一枚ずつタイプしてもらうなどというのはナンセンスだが、例えば縮尺可能なゼロックス機械を使って標題と著者名などの部分だけを、白い分類カードに複写して添付しておいてもらうだけでもずいぶん助かる。

数年前まで、お恥ずかしい話ながら雑誌 Amralen der Physik の略称によく Pogg. Amr. とか Wied. Amr. と書いてある理由がわからず、Pogg. や Wied. とは何の意味だろうと思っていたが、図書館で初めて、当時の雑誌には編集者の名を被せることがあったことを教えてもらって探し易くなったことがある。雑誌によっては途中で名前を全く変えてしまったり、

Compt. rend. などのように略称がいろいろあるものもあり、Trans. ASME と J. Appl. Mech. が1959年に改組されて5シリーズになったことぐらいは覚えていても、古いものになると専門家の助けがないと思わぬ無駄手間になることがある。いつでも相談に応じられる専門家を何人かは常駐していて欲しいと思う。特に、特殊誌の所在とか国内にない文献の入手法に通じていたり、最近の自然科学系でいうとソ連誌の対訳英文誌が多く出ているので、或るソ連誌の英訳誌が出ているかどうか、出れば巻号はどう対応しているか、といった問い合せにも応じてもらいたい。

3. 文献複写と図書館

文献複写について感じていることの第二点であるが、コピーを得ることがますます便利になっていくと図書館はどうなるのだろうか、という素朴な疑問を最近感じている。

本や雑誌は世界中でたった1冊だけ発行して、あとは全世界の図書館の複写サービス網を活用、なんていうことになるかどうかは別として、文献はやはりコピーがすぐ手に入ればよいというものでもなかろう。図書館にその雑誌があれば、パラパラと見て必要ところだけメモしても済ませられる。やはり図書館として

の本筋は十分な数の文献をもつように全力をあげるべきであって、文献複写サービスに一から十まで頼るのは誤りである。むしろ、これを利用して、例えば、幾つかの重要雑誌の19世紀以前のバックナンバーを全部ゼロックスやマイクロフィルムでそろえるということをして自然科学系の図書館でもやってもらいたいものだと思う。ただし所蔵文献を増やす場合、コピー入手の不便だった昔とは違って、極端に特色を持った集め方でもよいかも知れない。例えば慶応の工学図書館は中国とソ連の自然科学書専門、北大では18世紀以前専門、京大では化学系専門に集めるというようにである。

複写サービスだけで安心して、資料の購入がおろそかになることもあるまいが、図書館がゼロックス中心に動いているようになっては世の中マチガツトルと思う。街の文献情報サービス屋、街の複写屋とどう違うべきかをみんなでよく考えてみたい。

どうも勝手なことばかり書いたが、これも文献複写サービスをいかに重要に考えているかのあらわれだと思っただけで幸である。

大天才ならば、他人が既にやってしまった仕事の報告をウの口タカの口で読まなくても独創的大研究が生み出せるのかも知れないが、我々（失礼、我）の如き凡才にとっては、文献を読むことは三度の食事にもくらべられるものである。 (終)

メモランダム：OP Books の入手

図書館の文献複写サービスの普及によって、入手困難だったOP（絶版）図書が手に入り易くなった。図書館だけでなく、近頃では、OP資料を専門に複写して販売する商売がでてきた。ゼロックス社の子会社であるユニヴァシティマイクロフィルム社などは、この商売の中の最大のものである。

この会社のビジネスの特徴は、Johnson Reprint, AMS Press, Burt Franklin と云ったリプリント出版屋とは違って、お客の一つ一つの注文を受けて、お客の欲しい文献を複写・製本し、それを売るといふ、いわば、お誂えを基本としている。したがって、リプリント出版屋の、ややお住着的なものでなく、OP Books の入手にはより即時的で確実な方法である。

お値段は、ページあたり4セントから6セントとなっているが、3ドル以下の注文は受けない。また、部分複写も商いの外である。注文するときは、少し多めに勘定したほうが無難であるが、支払いは、見積書が送られてくる筈だから、その後になる。

ユニヴァシティマイクロフィルムのビジネスのもう一つの特徴は、アメリカの凡そ130の大学の博士論文の複写・販売をしていることで、この会社では、毎年12,000以上の論文を集めている。これなども、学術研究者にとってありがたいサービスである。なお、どんな論文が提出されたかを調べるには、三田本館レファレンスルームにある Dissertation Abstracts (八角塔第1号 p. 10 に紹介がある) で探させる。

フィルム・ライブラリー充実の急務

——特に古典学に於ける——

阿 部 隆 一

(斯道文庫主事・教授)

年代のはっきりした印刷物としては世界最古の遺品たる百萬塔陀羅尼を奈良時代の八世紀に摺刷した我が国は、中国と並んで世界で最も古い印刷文化の歴史を有する。しかし印刷された図書は仏典の僅かな範囲にとどまり、実用的な読む本は手で筆写した写本が長い間行われた。中国は宋代十一世紀後半からはやくも図書印刷の実用化が普及して写本から刊本の時代となり、西洋では十五世紀の中期にグーテンベルグが活版印刷術を發明してから、図書の印刷出版の普及発達は極めて急速であった。此に対し我が国に於ては、本というものが写本ではなく刊本の方が広く普及するようになったのは江戸時代に入ってからで、十七世紀中期以降である。このように古い文化を有しながら、写本の時代が他に比して長い間続いたという歴史上の因縁は図書の世界に於て現在も次の如き特徴を有するに至った。この特色は図書館や書誌に携わる者は心して銘記せねばならぬ事項である。

即ち、長い間転写を重ねて伝わったために、その伝承の間に誤脱錯簡が生じ、或はこのような無意識の譌謬の外に、後の手写者による意識的な改削追記が行われることは免れ難く、或はこの二要因が交錯するなりして、同一本でも異本が発生しやすく、現に異本の存在が他国の図書に比して極めて多く、その間の事情経緯が錯綜している。次に江戸時代に入って、有名な古典は上梓されて普及したが、それは多数の異本の中の一つが偶々底本として選ばれ、一旦板本となるとそれが普及し、次々と板を重ね、現在の通行の流布本として定着したのである。しかし或る一本が板本の底本に選定されるにあたって、学術的な価値評価と厳密な校訂を加えて、決定したとは必しも言えず、江戸前期にはそうでない方が寧ろ多い。我が国の古典古書の研究には通行の板本のみ reliant というわけに行かず、異本の調査複雑な校勘作業が必須となって来る。写本時代が長かっただけに、板本となったのはまだ幸福で、そ

れは室町までに成立した図書全体の中の九牛の一毛であらう。江戸時代に入って刊本主流の時代になっても、漢字という制約はアルファベット廿六文字の活字ですむ欧文印刷と違って、コストが高く、当時の整版印刷は多額の費用を要したので、著作論文の刊行の困難は現在の比ではない。従って価値高い著作でも今もって刊行されずに、未刊の写本としてのみ伝存するものがかなり多い。要するに我が国では凡ゆる意味で写本の占める比重が他の文明国に比して極めて高いというわけである。

同一本内でもテキスト上異本の多いことは、できるだけ原本に復元する校本作製の校勘作業も勿論することながら、各異本も亦その発生成立過程に於ける各時代の文献文化史の見地から独自の研究対象たり得る。また写本類は本文そのものが重要であるばかりでなく、例えば今筆者が研究している我が国の漢籍の古写本の如きは、その多くはヲコト点や訓点が附され、且つ解釈上各種の注釈書や典籍からの引用文の抄録の書入を有する。この訓点は国語学上の重要資料であり、その訓点や書入からその当時講読解釈の実状が具体的に明かになり、その書入の中には間々中国にもその伝存を失った亡佚書からの引用を発見することがある。旧刊本も板本そのものとしての価値の外に、その書入の上から見て優るとも劣らぬ貴重性を誇り得るものがある。旧鈔本・旧刊本というものはその本来の本文のテキスト上の価値のみならず、見方を変えればとも思ふよらぬ脚光を浴びて価値が現れることがある。その文献がどういふ面から必要となるか予想もつかぬ場合もある。つまり一本一本が個性を有し価値を内蔵していると考えねばならぬ。古書を正確に翻刻し、或は厳密



な校訂を加えて活字化することは一番よいが、人の為す業であるから、誤りなきは保証し難く、校合に使用した諸本悉くを忠実に復元することは不可能に近い。しかもその古鈔本が見方によって、どれが研究家にとって必要となるかわからぬとすれば、原本そのままに近い忠実な複製本で発行するのが一番よいわけである。しかし、ごく少数の高度の研究者に必要な諸本を悉く影印するということは実現不能の夢物語である。

我が国は古写本に恵まれたること恐らく世界一と言ってよい。しかしその割には未開拓の分野が多い。資料が多く恵まれすぎて却って研究者が悲鳴をあげてお手あげということもあるかもしれぬが、案外調査が進まなかったのは次の如き隘路があった。美術品なら一本勝負で行くが、本は内容を読まねばならぬ。それには時間がかかる。読むばかりでなく備忘の為に忠実に写しとらねばならぬ。しかも一本ではすまず、学術的には同一系の幾多の諸本を精密に比較せねばならぬ。もっと困ったことには、此等諸本が同一文庫内にあるなら比較的容易である、そういう幸運にははずめたにめぐり合わない。各地に散在し、しかも各本が門外不出の貴重書であることが多い。こうなると甲、乙、丙、丁の諸本を一堂に集めて比較することは不可能である。比較校勘という文献学上不可欠の調査を実行する為には、各本の忠実正確な副本を作成して、それを以て代用する外ない。その副本作製は所謂ひきうつしで薄葉紙に書写された臨写本と摹写本と称されるものである。これには多大の時間と労力と費用を必要とすることは想像に余りある。古来学者は極めて困難な悪条件にもめげず此を行っておる。しかし不幸にして個人の力には限度があり、その範囲は狭く全体としては微々たるものであった。此は国家或は強力な団体機関がなすべき事業である。

写真技術の発達は当然複写に応用された。立派な手書きの摹写は写真複写よりも或る意味で優れ、捨て難い長所があるが、労力費用時間の経済簡便の点では、問題にならぬ。しかし戦前に於ては写真複写はまだ費用の上でかなり高価で、素人が簡単に大量に撮影するというわけにゆかなかった。戦後マイクロフィルムの発達は、劃期的なもので、古典古文献の学徒といえれば必ずカメラを携えてパチパチととりまくる調査光景を見るに至ったことは周知の通りである。フィルム方式のみならず、リコピー、ゼロックス等便利な複写技術

が次々と現われ、複写技術の将来の進歩は予想もつかぬほどである。

我が国に於ては特に古書の副本作製が極めて重要な地位を占めねばならぬとするならば、図書館、わけても基礎研究をなすべき大学図書館・研究室は、その本来の性格から、蒐集の上で、原資料や既製の図書の購入と並んで、副本を自ら作製することによる蒐集保管に努力せねばならぬことは自明であろう。しかし甚だ残念というか不幸というか、この自明なことが、従来大学図書館の如き専門研究機関に於ては、絶無とは言わぬが、殆ど顧慮されなかったのである。過去とは言わぬ、これだけ複写技術が簡便になり普及した現在でもなお、副本作製は個々の研究者の雀の涙ほどの零細な研究費の涙ぐましいやりくり算段にまかせて、図書館側は手をこまねいているというのが実状である。明治以来百年間の図書館史上の何という奇妙な光景ではないか。盲点と言えこれほどの盲点はないではないか。此で立派な高度の文献学古典学の発達が望めるであろうか。

図書館側が供手傍観しているとは酷評ではないか、複写サービス業務の拡充強化は最近の図書館の流行で、その実績は刮目すべきであると言うかもしれぬ。最近の各図書館の複写サービス業務の成績の向上は利用者の一人として私も大に感謝し、敬意を表する。しかしここに言わんとするフィルムライブラリーの問題に対しては、現在の複写サービスは間接的参与後援であって、直接的参与ではなく、問題は異なる。今の複写サービスは、自館所蔵の文献を利用者の要求に応じて複写してやることである。また図書館が現在行っているマイクロフィルムの蒐集も、活版・影印様式の印刷発行では採算に合わぬが、マイクロフィルムのプリントなら発行可能というそろそろ出かかった既製品を購入する域にとどまっている。此は蒐書態度としては、本屋から本を買うのと本質的には変わらぬもので、ただ紙製品がフィルム製品に変わっただけである。蒐書方針に原理上新な進展を見たわけでない。

大学の如き基礎研究を主眼とする学術図書館は、蒐書保管上、当面の要求のみならず、後世の研究者に対する配慮、過去の文化財の保存という三要件を充足すべき任務を有する。研究利用の立場から言えば、蔵書は内容構成無秩序無体系な集合で徒に数量を誇るよりは、一定の件名課題下の図書が体系的に可及的に網羅

な校訂を加えて活字化することは一番よいが、人の為す業であるから、誤りなきは保証し難く、校合に使用した諸本悉くを忠実に復元することは不可能に近い。しかもその古鈔本が見方によって、どれが研究家にとって必要となるかわからぬとすれば、原本そのままに近い忠実な複製本で発行するのが一番よいわけである。しかし、ごく少数の高度の研究者に必要な諸本を悉く影印するというは実現不能の夢物語である。

我が国は古写本に恵まれたこと恐らく世界一と言ってよい。しかしその割には未開拓の分野が多い。資料が多く恵まれすぎて却って研究者が悲鳴をあげてお手あげということもあるかもしれぬが、案外調査が進まなかったのは次の如き隘路があった。美術品なら一本勝負で行くが、本は内容を読まねばならぬ。それには時間がかかる。読むばかりでなく備忘の為に忠実に写しとらねばならぬ。しかも一本ではすまず、学術的には同一系の幾多の諸本を精密に比較せねばならぬ。もっと困ったことには、此等諸本が同一文庫内にあるなら比較的容易である、そういう幸運にはまずめったにめぐり合わない。各地に散在し、しかも各本が門外不出の貴重書であることが多い。こうなると甲、乙、丙、丁の諸本を一堂に集めて比較することは不可能である。比較校勘という文献学上不可欠の調査を実行する為には、各本の忠実正確な副本を作成して、それを以て代用する外ない。その副本作製は所謂ひきうつしで薄葉紙に書写された臨写本と摹写本と称されるものである。これには多大の時間と労力と費用を必要とすることは想像に余りある。古来学者は極めて困難な悪条件にもめげず此を行っておる。しかし不幸にして個人の力には限度があり、その範囲は狭く全体としては微々たるものであった。此は国家或は強力な団体機関がなすべき事業である。

写真技術の発達は当然複写に応用された。立派な手書きの摹写は写真複写よりも或る意味で優れ、捨て難い長所があるが、労力費用時間の経済簡便の点では、問題にならぬ。しかし戦前に於ては写真複写はまだ費用の上でかなり高価で、素人が簡単に大量に撮影するというわけにゆかなかった。戦後マイクロフィルムの発達は、劃期的なもので、古典古文献の学徒といえれば必ずカメラを携えてパチパチととりまくる調査光景を見るに至ったことは周知の通りである。フィルム方式のみならず、リコピー、ゼロックス等便利な複写技術

が次々と現われ、複写技術の将来の進歩は予想もつかぬほどである。

我が国に於ては特に古書の副本作製が極めて重要な地位を占めねばならぬとするならば、図書館、わけても基礎研究をなすべき大学図書館・研究室は、その本来の性格から、蒐集の上で、原資料や既製の図書の購入と並んで、副本を自ら作製することによる蒐集保管に努力せねばならぬことは自明であろう。しかし甚だ残念というか不幸というか、この自明なことが、従来大学図書館の如き専門研究機関に於ては、絶無とは言わぬが、殆ど顧慮されなかったのである。過去とは言わぬ、これだけ複写技術が簡便になり普及した現在でもなお、副本作製は個々の研究者の雀の涙ほどの零細な研究費の涙ぐましいやりくり算段にまかせて、図書館側は手をこまねいているというのが実状である。明治以来百年間の図書館史上の何という奇妙な光景ではないか。盲点と言えこれほどの盲点はないではないか。此で立派な高度の文献学古典学の発達が望めるであろうか。

図書館側が供手傍観しているとは酷評ではないか、複写サービス業務の拡充強化は最近の図書館の流行で、その実績は刮目すべきであると言うかもしれない。最近の各図書館の複写サービス業務の成績の向上は利用者の一人として私も大に感謝し、敬意を表する。しかしここに言わんとするフィルムライブラリーの問題に対しては、現在の複写サービスは間接的参与後援であって、直接的参与ではなく、問題は異なる。今の複写サービスは、自館所蔵の文献を利用者の要求に応じて複写してやることである。また図書館が現在行っているマイクロフィルムの蒐集も、活版・影印様式の印刷発行では採算に合わぬが、マイクロフィルムのプリントなら発行可能というそろそろ出かかった既製品を購入する域にとどまっている。此は蒐書態度としては、本屋から本を買うのと本質的には変わらぬもので、ただ紙製品がフィルム製品に変わっただけである。蒐書方針に原理上新たな進展を見たわけでない。

大学の如き基礎研究を主眼とする学術図書館は、蒐書保管上、当面の要求のみならず、後世の研究者に対する配慮、過去の文化財の保存という三要件を充足すべき任務を有する。研究利用の立場から言えば、蔵書は内容構成無秩序無体系な集合で徒に数量を誇るよりは、一定の件名課題下の図書が体系的に可及的に網羅

される、構成上の緊密度を尊しとする。研究が奥深く精密になればなるほど原資料が重んぜられ、既成の刊本のみでは間に合わなくなる。ある課題の図書資料を尽く完璧に網羅することは理想であるとしても、それに幾分近い或る水準まで図書構成を充実しなければ、学術研究上の専門図書館の実をなし得ぬ、図書館が当然なすべきことをしないために、現在では已むを得ず、研究者が個々ばらばらに複写に右往左往東奔西走せざるを得ない有様である。その労力時間は大変なものである。もっと此を有効に振りむけねばならぬ。個人が銘々複写撮影をしているから、その複写本は当然個人の所有物で、公開されない。研究者同志の間で連絡はごく親しい間柄が偶然による外期待できぬから、同一本を幾人かの研究家がばらばらに複写撮影を申し込むということになる。そのロスは大い。度々複写撮影を重ねれば、場合によっては原本をいためる危険性はかなり多い。また原本が公開図書館の蔵本であればまだしも、個人の蔵本である場合は、いくら研究の爲めとはいえ、所有者側の迷惑も察せねばならぬ。研究者個人が本を多く私有するよりは、図書館研究室の蔵書に依存する傾向は益々大きくなり、時代の趨勢からもそれは寧ろ歓迎すべきで、複写もなお一層そうであるべきである。文化財の保存という見地からは、万一の災に備えて副本をとっておく必要は多言を要しないであろう。

図書館が図書を死蔵する倉庫に止ってはならぬ、積極的な活用法を構すべきだとする奉仕サービス論が現代の図書館論議の焦点をなしている。まことにそうである。多々益々辨じ、その実行施設に工夫に工夫をこらすべきである。しかし、児童図書館ならいざしらず、専門研究者を利用者とする大学専門図書館のサービスの根幹は蒐書と目録の完備である。此が完備してなければサービスをしたくともできる筈がない。所が肝腎かなめの蒐書の問題が案外閑却されている傾向は寔心に耐えぬことである。図書の蒐集には原資料を蒐集することにこしたことはない。しかし財政の制限もあり、またそれが仮に許せたとしても、必要図書構成の充実には、金を積んでも入手し得ないものがある。それにはどうしても副本を以て補わねばならぬ、学術の進歩複写技術の発達はその重要緊急度をより高めるであろう。フィルム・ライブラリー（ゼロックスその他の複写技術によるものを含む）の充実強化に各学術図

書館が積極的に乗り出さねばならぬ機運は熟しすぎている。ここには古典学や古書を対象とする学門分野の見地から特に論じて来たわけであるが、この趣旨とは原則としては凡ゆる学術分野に共通し得ると言ってもよい。

我が斯道文庫が東洋古典の研究所として本塾に創立された時、マイクロフィルム撮影による副本作製とその保管公開を原資料の蒐集と並んで最重要事業の一つに選定し、フィルム・ライブラリーの充実に多大の努力を傾けて来たのは、古典の研究所としては当然の行き方であるからである。我が国では不幸にして、このフィルムライブラリーの充実と公開という企てが未だに殆ど他に類を見ないので、幸に学界の注目を浴び、利用も多い。私は研究者としてはマイクロフィルムの資料を使用しない日は殆どないほどの利用者であり、調査研究の過程では、資料を探訪して自分で複写撮影をなす撮影者でもある、一方斯道文庫の責任者としては、マイクロフィルムの蒐集保管公開業務を担当する管理奉仕者の立場にある。こうした蒐集保管奉仕から利用へとつらなる全径路に互って関与する経験から、フィルム・ライブラリーの実際上の具体的諸問題にふれてみたい。

以上述べた所では、副本作製による資料蒐集という学術図書館の重要な任務に対しては、図書館は無為無策、まるで図書館人に人なき感を与えたかもしれぬ。しかし図書館がこの点に気づかないわけでは決してなかった、現在でもそれが積極的に採りあげられないのは、それ相当の理由があるからである。財政の不如意は当面の蒐書に追われて、心ならずもそこまで手が伸びなかったことも大きな理由の一つであろう。しかしそればかりでない、これから述べようとする理由は人の看過している所であるが、それを省みずしては、将来の古典古書に関するフィルム・ライブラリーの健全な発達は望むべくもない。やみくもにフィルム・ライブラリーの創設を企て実行しても、混乱を起すばかりで、目的を達成するわけに行かぬ。金と複写機とオペレーターさえあって、撮影しまくれば、フィルム・ライブラリーはたちどころにでき上ると考えれば大間違である。次に我が国で副本作製が図書館で何故積極的に行われなかったかという理由から考えてフィルム・ライブラリー設立充実の具体策の実際面について気づいた諸点を述べたい。

江戸時代古書の副本作製を組織的に行った代表は水戸藩の彰考館である。徳川光圀が大日本史編纂の必要から、史料の探訪に史臣を全国に派遣して、主要典籍古文書を書写せしめたわけである。この副本の中には原本が散逸して、現代では極めて貴重な存在となっているものが多い。このような基礎史料の組織的博搜、周到な校勘作業の上に立つ修史事業は、世界の史学史上近代的歴史編纂の先駆をなすもので、ただただ敬服の外ない。明治前期には本を写すということが今と違って知識人には日常の茶飯の事であった習慣もあって、政府や図書館でかなり古書の副本謄写が行われたが、古書の活版翻印が盛になるにつれて、それに安心したせいか、漸次廃された。明治以来一貫して副本作製を継続したのは、東大の史料編纂所で、戦後はマイクロフィルムによるものが主となっている。此は大日本史料古文書の編纂の為め、典籍は従て、文書記録が主となっている。しかし、古書の副本作製は昔も今も公の機関よりは、学者個人が行っている方が遙かに多く、公私いづれにせよ、研究調査の已むを得ざる必要から行われ、研究と密接に関連していることに注目せねばならぬ。

副本を作製するにあたっては、先ず当該本がどこにあるかを捜り当て、その所在を明かにせねばならず、次の調査の結果、その価値評価を下して、始めて実行される。それは専門の研究者でなければ不可能である。副本作製事業は研究調査に直結平行するもので、否研究調査のプロセスの一環と看做すべきである。新刊本や古本、言わば既製の図書の蒐集は、必ずしも学者でなくとも可能である。研究家の協力を得るにこしたことはないが、現在大ていの図書館の蒐書運営の実際の担当者は学者ではない。副本作製による蒐書は研究者でなければ実行不能である。此が直風の研究者を有しなかった我が国の図書館が副本作製による蒐書を行い得なかった大きな原因の一つであろうと思う。そうすると機構の本質上では過去と大差ない現在の図書館でフィルム・ライブラリーの充実を図るにはどうすればよいかということが問題になって来る。

それには図書館と研究者との密接な協力態勢を作る

ほかない。蒐書方針・計画を立て、図書館が予算の心配をして、研究者に調査撮影を委託して、複写したフィルムや印画焼付を研究者図書館が共同して整理し目録を作製して、図書館が保管公開するのが日本の現状では最も具体的な常道であろう。研究者が盛に複写を行っているが、その費用は文部省の研究補助によるものが多い。規定ではその複写物は所属の研究機関の備品とすることになっているのであるから、今後フィルムや焼付写真が大学図書館や研究室の架蔵に入るとは益々多くなる筈である。手始めにこの制度を善導することが大切である。ここで大切なことはフィルムの整理と目録の著録の仕方をきちんとすることで、どの図書館もこれには当惑きみで、まだ未整理がよい加減に放置している所が多いようである。実際原本を調査し、複写を担当した人は原本をよく知っていて、その複写物がその個人の私物である限りは問題ないが、それがその人を離れて、公開され、一般の人や後世の人も閲覧するとなると、原本を見ない場合十分に利用でき難い。史料編纂所の臨写本には某蔵本を某年某月に謄写すと記すのみで、原本についての書誌的説明が何等附されてないので、後になると利用にあたり、書写年代その他について隔靴搔痒のもどかしさを感じる場合が往々ある。従って必ず書誌的調査の要旨を記し添えておかねばならぬ。斯道文庫では、必ずターゲットにその形状寸法から始まって書誌的説明の大要、朱筆が入っているとか改装とか写真ではわかりにくい点は特に注意して記し、そのターゲットを最初に撮影してから、次にその本の撮影に入ることにしている。現在ターゲットには所蔵者書名程度を記して、備忘用にしてはいるが、保存公開を計る以上、書誌的説明を記しておかねば、後世に悔を残すことになる。フィルムの目録の記述も書名著者名程度の簡単なものでなく、他と識別し得る該本の特色を簡潔に表示するものでなければ、役に立たぬ。マイクロ関係の目録著録については新例であるだけ十分に研究の余地がある。紙数も尽きたから、具体的な諸問題については別の機会に述べることにしよう。

慶応義塾大学目録法の標準化

<p>328.453 C1 1</p> <p>Clare, Matthew St. Clair. Legislative and commentary history of the Bank of the United States, including the original Bank of North America. Compiled by M. St. Clair Clare & D. A. Hall. New York, A. W. Walker, 1907. 87p. (Reprints of economic classics) First ed. Huntington, Gale & Bowen, 1872.</p> <p>1234-252 84568 2454</p>	<p>9 561.0233 V1 1</p> <p>Yu, Tsun-ii. The steel industry in communist China. By Tsun-ii Yu, with a contribution by Hsueh Hsueh. New York, published for the Hoover Institution on War, Revolution, and Peace, by F. A. Praeger [1967]. 334p. 4 tables in pocket.</p> <p>2452</p>	<p>9 328.07 B2 1</p> <p>Schubner, Nikolai Nikolaevich. 1917. Tagebuch der russischen Revolution (vom 10ten März bis zum 1ten März 1918). Herausg. von Joseph-Bill. Stuttgart und Prag, von Nikolai Dierl, Vorwort von Iring Feinberg. München, Piper [1967]. 775p.</p> <p>2452</p>	<p>9 366.0217 B1 1-4</p> <p>Pani, Luigi Gal. Storia del lavoro in Italia dagli inizi del secolo XVIII al 1813. 2. ed. accurata ed illustrata. Milano, A. Giuffrè, 1958. xx, 629p. (Storia del lavoro in Italia, v. 6)</p> <p>2452</p>
<p>9 366.46 C1 1</p> <p>Sociedad general de seguros de accidentes por la vida y de rentas viageras. Mémoire pour servir à l'histoire des assurances sur la vie et des rentes viageres aux Pays-Bas. Mémoire et publié par la direction de la Société générale d'assurances sur la vie et de rentes viageres. Amsterdam, 1905. 297p.</p> <p>1239-239 2461 114</p>	<p>9 311 L2 1</p> <p>Lee, Edward H. ed. Nomenclology and orientalism. Ed. by Edward H. Lee and Maurice Mandelbaum. Baltimore, Johns Hopkins Press [1967]. 267p.</p> <p>2457</p>	<p>9 360.4 B1 1</p> <p>Horton, Robert K. ed. Contemporary social problems. Ed. by Robert K. Horton and Robert A. Hinde. Contributors: John A. Ciomann [and others]. Ed. ed. New York, Harcourt, Brace & World [1966]. 947p.</p> <p>2465</p>	<p>9 059.6 V1 1</p> <p>Wormann, Georg. <u>firm publishers.</u> Bibliographisches Verzeichnis grosser Altes zur Weltgeschichte. Frankfurt, Altmann, Müller, Metzler, 1882. Usp. von Hermann Stier [et al.]. Bearb. von Hermann Stier [et al.] unter Mitarbeit von Bernhard Amer [et al.]. Berlin [1965]. 4196f. xx, 170p.</p> <p>2461</p>

塾内洋書目録法の統一・標準化について

中 村 初 雄
(文学部図書館情報学科教授)

はじめに

こういった問題について、その目的、効用等を論じてゆくことは容易ではない。我々はややともすれば、それが応用の学であり、当初の目的にどの程度合致したかを評価の基礎にするということを忘れてしまうことがある。そのためか、机上の抽象的議論で堂々めぐりにおわり、みのりすくなき grübeleil (思い煩い) になってしまふことが多い。

一般論を論じ、その上で特殊な範囲に限定して論じたり、実施してゆくのは、私共の投入し得るエネルギー総量がきまっているからで、その効果(生産量)をみとどけながら、次第に範囲を拡げてゆくのは、実学の徒のよく採用する術策である。効果がない場合には方針変更ということもおこらう。しかしこの場合の効果測定週期は慎重に考慮してきめなければならない。しかもそこで測定された絶対値に着眼して方針を変更するのではなく、2週期、3週期と測定してゆき変化の割合から診断してゆくことが重要である。レッシングが図書館長としての責任をとわれたのも、この間の事情を無視したからである。

比喩は飛躍するが、私が、老眼鏡をかけなければならなくなったのは、10年前留学中のことである。二焦点めがねに馴れなくて、半年間はかけたり外したりしたあげく、ヤウヤク常用する決心がついたことを思いおこす。しかし近頃流行の三焦点めがねにきりかえる気はおこらないのである。図書館人の中には、遠距離、近距離だけでなく、中距離(書架を見る場合)に

も好都合な三焦点めがねを愛用する人も多いようであるが、費用の問題は別とし私にはそれに馴れ込んでゆけるという自信がない。

規格を統一すること、注文に応じての設計ということには、それぞれ利害得失があろう。所謂きめのこまかい多種類の規格を作るというのは一つの解決であるが、問題はどの程度の種類で妥協してゆくかである。

双発機用の発動機として、右まわりと左まわりと一個づつつけておいた方が設計上無理がないとわかっていたとしても、補給上の問題その他の見地から考慮して、一種類の発動機だけを二個用い、釣り合いおもりなどで解決してしまった方が有利なこともある。

目録の目的

Quigg はその *Theory of cataloguing* 1966 (p. 10) で“カッターが目録法の目標・目的について仔細に検討していることは本質的に正当・有効なことであって、その後の人々が言っていることは、大抵の場合そのくりかえし陳述である。”と指摘している。

私も昨年の *Library Science* (No. 5 p. 99) に書いておいた。



Cutterがその辞書体目録規則に明らかにした目録の目的というのは、いろいろと批判的とはされたが、しかしそれをそのまま引用、支持した人も多いのである。1876年の初版をほとんどそのまま、2版から4版(1904)まで踏襲しているのはそのためである。引用しておこう。

1. ある図書を探し出すのを可能にする。その図書については、探す人が次のどれかを知っていることを前提にする。
 - A. 著者について知っている場合
 - B. 書名 "
 - C. 主題 "
2. その図書館にどんな図書があるかを示すために。その際も条件で分けると
 - D. 特定の著者によって作成されたもの
 - E. 特定主題についてのもの
 - F. 特定の(文献)種類のもの
3. いろいろと図書がある中から特定の図書を選び出すときの補助(参考)資料として
 - G. どういう版であるか
 - H. どんな性格(文献の性格又は論題としての性格)であるか

上記の件に関する最近の解釈については既に報告があるのでその意義などについて論じるのは避けるが、Cutterの論じていたことが、今日的意義を持っておりということを紹介しておきたい。

A, Cについては論ずるまでもない。B, 即ち書名(標題)を知っているという場合については若干説明を要する。個人の著作である場合には、このことは特に印象にのこるような書名、重要な意味を有する書名が副出されるという具合に説明される(注)。またたとえば雑誌類のように、それを代表させるのには、編者だとか個々の著者、論題に比し、誌名の方が有力であるといった場合には当然、その誌名が直接出る。

Dについては以前からあるいくつかの問題点がある。一人の著者でいろいろと筆名を使いわけているとか、筆名を変えてゆくという場合などがある。それらの場合の取扱いは、規則、規則によってまちまちである。それぞれに理由があり、どれでなければいけないということはない。ただ一度採用した方針は一貫して守りつづけてゆき、みだりに変更したりしないことが肝要である。

E, Fはむしろ主題(分類・件名等)の問題といえよう。

G, Hについては、確かに必要ではあろうが、最近の目録界の傾向からいうと、これらを考慮して、全資料について詳細な記述を行ってゆくことは不可能、非能率であるとする意見が多くなっている。このあたりの段階は、個々の司書の記憶力にたよるなり、またはその都度、現物にあたって判断するにしくはないということであろう。選択的目録(書誌)の場合にはいざしらず、大規模の目録では不可能となってきたのである。

I F L A 目録原則国際会議報告(図書館雑誌56巻5号 p. 257)で私が、デンマーク、スウェーデン代表棄権の理由としてあげておいたこと、また Quigg が Shera の言葉を解説しているのも同じことであろう。“この陳述は書誌的識別機能(Gに対応)が次第に薄れてきて、その機能は次第に、印刷・出版されている書誌奉仕によってカバーされるようになっていくことを示唆している。”棄権した司書達は、この趨勢を鋭敏に感じとり、また今迄の遺産に拘束されることもすくない人達であった。

本塾目録最低基準小委員会の答申

昨年5月26日に、研究・教育情報センター実行委員長に答申した内容は基本記入における記載事項にまで杓子定規な機械的統一を意図したものではない。記載事項についてはむしろ最低基準での要素の外に、各所における特殊事情からくる要求をみたすべき項目の追加は望ましいとしているのである。

統一、標準化と特にうたっているのは、目録とは、資料の存否を確認、あった場合にはそれをとり出す為の道具とみての、標目の統一が主なのである。

塾内洋書の目録記入については、A L A規則(1949)およびL C記述目録規則に暫定的に準拠し、Anglo-American 目録規則(1967)を研究・検討しつつ、将来における慶応義塾大学、洋書目録規則の確立を目指す。

もしもこの表現が「塾独特の目録規則の編さんを期す。」といった風に解されるとしたら、それは私共の国語表現の未熟の故である。小委員会の趣旨はあくまでも、国際的な約束にあわせてゆくことが能率的であろうという信念にたっているのである。

去る2月26日には、外国語逐次刊行物(雑誌)の目録記入についての答申を行った。その趣旨は、“標目のとり方についてはAnglo-American 目録規則(1967)

に準拠し、研究・検討を行いつつ将来における統一目録規則の確立を目指す。”ということにある。

“何故外国語単行書も含めて Anglo-American 目録規則に準拠出来ないのか” “非図書資料の整理をどう考えているか” 等の疑問はあろう。私はこれらに対して実際的な理由づけ（間接的証明）しかできない。

逐次刊行物は、学術論文を収容した容器とみるべきで、その利用密度は非常に高い。新規則での逐次刊行物の扱いは、標目決定の面ではわかり易くなっており、記述の面では補足がなされており改善されているということが明白であるからである。廃刊になったものは別として、現在も刊行され受け入れられているものの種類数は新規則で処理しきれぬという程の数ではないからである。

非図書資料、たとえば地図、フィルムストリップ、映画フィルム、楽譜、録音、絵画・写真・設計図等に

ついて、新規則の方が旧規則よりも便利であるということが確認され、従来の規則でとられた記入の数があまり多くないのであったなら、新規則に準拠するようにするのも結構であろう。しかしいつでも、司書たるものが心がけていなければならないことは、いかなる効率が得られるかをみとどけることである。しかも近視眼的でなく、相当週期をみての、実行一反省一実行の反復の結論としてである。

(注) どういう書名が印象にのこる書名なのか、重要な意味を有する書名なのかは、経験を積みながら把握してゆく外はない。目録係は利用者の要求に焦点をあて、館の蔵書と実状にてらしあわせながら判断してゆかなければならない。生産量（ここでは作業能率とか利用者の満足度と言ってもよい）測定もクライテリアにならう。

情報センターニュース

塾の研究・教育情報センター実行委員会で昨年行った教員の文献利用に関する調査の報告が、先頃、情報センター事務局から上記の委員会、および情報センター一本委員会に提出された。最終的な集計と分析の報告は、今後発表される予定であるが、以下は、その報告の要約である。

図書館の蔵書に関する質問に対して、三田、日吉、工学（小金井）の各図書館には、自分の専門分野および専門分野に隣接する領域の図書資料は、多いという解答と少いという解答が同じ程度であったが、医学図書館（四谷）に関しては、多いという答えが圧倒的に多かった。蔵書の整理に関する質問についても、医学図書館では整理がよく行なわれていて資料の検索に便利であるという答えが非常に多かったが、その他の図書館では、良否の解答が同じくらいであった。

三田と日吉の研究室の利用については、設備の不十分さを訴える声が、まず、非常に多かったことと、資

料面については、文献検索のための参考資料が少なく、整理が十分には行なわれていないという声が三田の研究室では多かった。

図書館と研究室における将来のサービスに対しては、まず、上記のような不備をなくすこと、すなわち、収書方針を調査などにより確立し、図書予算を増額し、さらに、整理方式の統一をはかり、全塾の資料の所在を明らかにするために総合目録を編さんすることなどの希望が多くあり、さらに、(1)新着図書・雑誌リストの配布、(2)新着雑誌の内容目次リスト（コンテンツサービス）、(3)新着図書の専門主題別リストの配布、(4)雑誌論文索引の配布、(5)専門の係員およびコンピュータなどを利用して行う文献・情報サービス、(6)複写サービスの充実などのサービスに対して、期待を寄せるという解答が非常に多かった。

情報センターに対しては、またその構想・基本方針を確立し、その自覚にもとずいて発展をはかるようにという意見があった。